

2013年9月30日 全5頁

Indicators Update

8月鉱工業生産

生産は増勢鈍化も、先行きの生産計画は強気

経済調査部
エコノミスト 橋本政彦

[要約]

- 2013年8月の生産指数は、前月比▲0.7%と2ヶ月ぶりの低下となり、市場コンセンサス（同▲0.3%）を下回った。3ヶ月移動平均値で見ても、2ヶ月ぶりの低下となり、生産の増勢は鈍化している。出荷指数は前月比+0.4%と2ヶ月連続の上昇となり、在庫指数は同▲0.1%と3ヶ月ぶりの低下となった。
- 8月の生産を業種別に見ると、前月から上昇した業種が7業種、低下が7業種、横ばいが1業種となっており、一進一退の結果となった。低下した業種に関して見ると、はん用・生産用・業務用機械工業、化学工業、輸送機械工業の低下が生産全体を押し下げた。
- 製造工業生産予測調査によると、2013年9月の生産計画は前月比+5.2%、10月は同+2.5%となった。このところ実現率はマイナス圏での推移が続いていることから、製造工業生産予測調査については割り引いて見る必要があるが、生産は今後増勢を強める計画となっている。
- 先行きに関して、生産は今後も増加基調が続くと見込んでいる。生産が安定的に増加するかどうかは、輸出数量の増加がカギとなる。新興国経済の減速等から、輸出数量の増勢はこのところ鈍化しているものの、米国の景気拡大や円安の効果によって今後も増加傾向が続くとみられ、生産を牽引する見込み。さらに、2012年度補正予算による公共投資の増加や、2014年4月に予定される消費税増税前の駆け込み需要によって、内需は年度末にかけて加速し、生産を押し上げる公算が大きい。

鉱工業生産の概況（季節調整済み前月比、%）

	2012年		2013年							
	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
鉱工業生産	▲1.0	1.4	▲0.6	0.9	0.1	0.9	1.9	▲3.1	3.4	▲0.7
コンセンサス										▲0.3
DIR予想										0.0
生産者出荷	▲1.6	3.7	1.2	1.8	▲0.8	▲1.4	1.0	▲3.2	2.0	0.4
生産者在庫	▲0.4	▲1.3	▲1.6	▲1.2	▲0.7	0.8	▲0.4	0.0	1.6	▲0.1
生産者在庫率	0.0	0.0	▲3.8	▲2.6	2.3	▲5.1	▲2.1	5.9	▲0.5	1.6

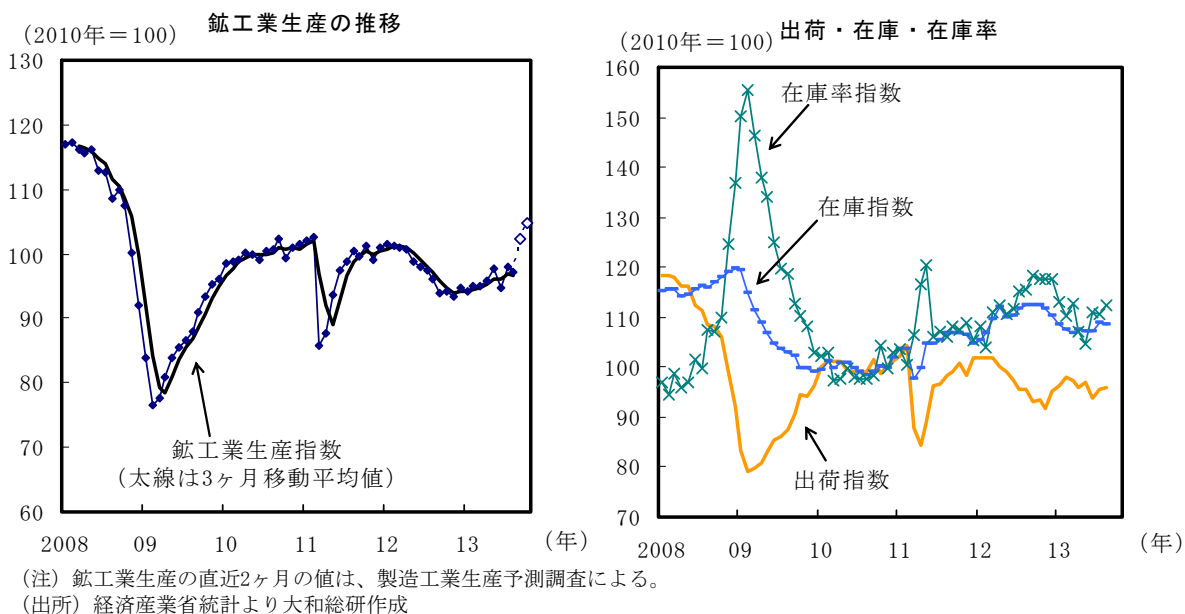
（注）コンセンサスはBloomberg。

（出所）経済産業省、Bloombergより大和総研作成

生産指数は2ヶ月ぶりの低下

2013年8月の生産指数は、前月比▲0.7%と2ヶ月ぶりの低下となり、市場コンセンサス（同▲0.3%）を下回った。3ヶ月移動平均値で見ても、2ヶ月ぶりの低下となり、生産の増勢は鈍化している。出荷指数は前月比+0.4%と2ヶ月連続の上昇となり、在庫指数は同▲0.1%と3ヶ月ぶりの低下となった。

生産・出荷・在庫・在庫率の推移

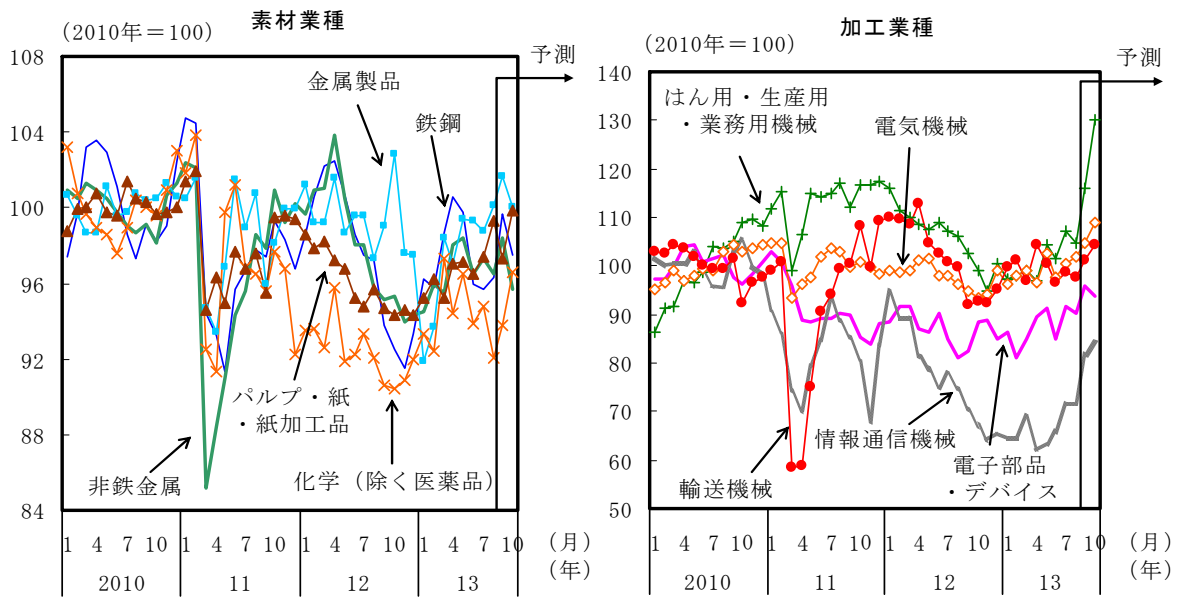


加工組立業種を中心に9月、10月の生産は増加見込み

8月の生産を業種別に見ると、前月から上昇した業種が7業種、低下が7業種、横ばいが1業種となっており、一進一退の結果となった。低下した業種に関して見ると、はん用・生産用・業務用機械工業（前月比▲2.4%）、化学工業（同▲2.8%）、輸送機械工業（同▲0.9%）の低下が生産全体を押し下げた。ただし、これらの業種では前月時点の製造工業生産予測調査で8月の減産を見込んでいたため、概ね想定内の内容と言える。一方、電子部品・デバイス工業が予測に反して低下したこと、大幅な増加を見込んでいた情報通信機械工業が横ばいに留まったことから、生産は予想から下振れした。

製造工業生産予測調査によると、2013年9月の生産計画は前月比+5.2%、10月は同+2.5%となった。9月に関しては、紙・パルプ工業を除く全ての業種が増産を見込んでおり、中でも、はん用・生産用・業務用機械工業と情報通信機械工業の高い伸びが全体を牽引する見通しとなっている。10月については、鉄鋼業、非鉄金属工業などで減速を見込む一方で、はん用・生産用・業務用機械工業、電気機械工業、情報通信機械工業、輸送機械工業など、加工組立業種の多くで増産が続く見込み。このところ実現率はマイナス圏での推移が続いていることから、製造工業生産予測調査については割り引いて見る必要があるが、生産は今後増勢を強める計画となっている。

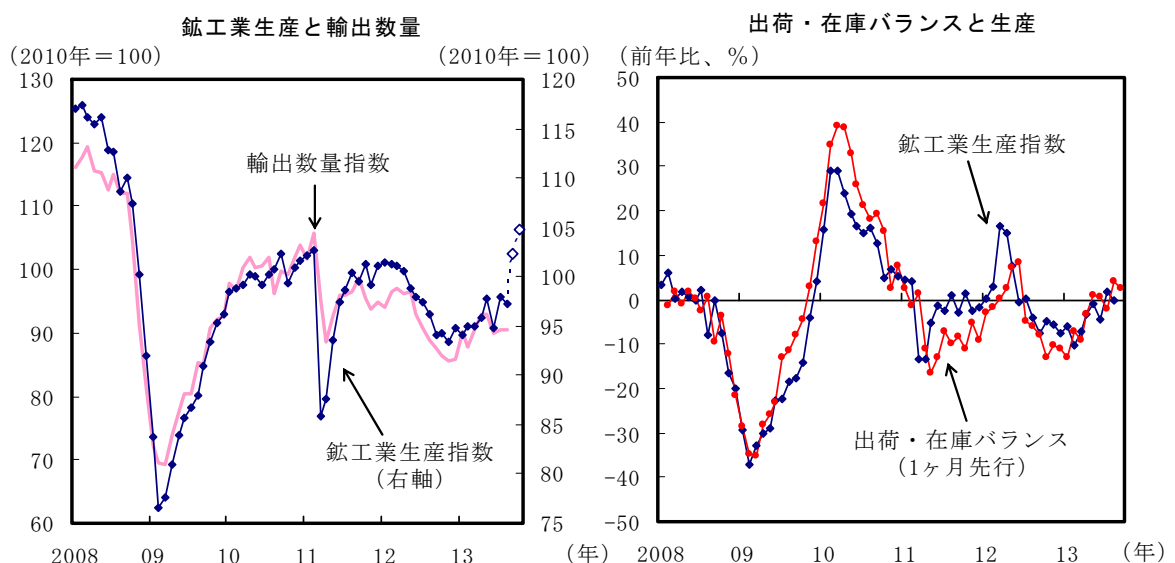
主要業種の生産推移



生産は輸出の増加に牽引されて増加傾向が続く見通し

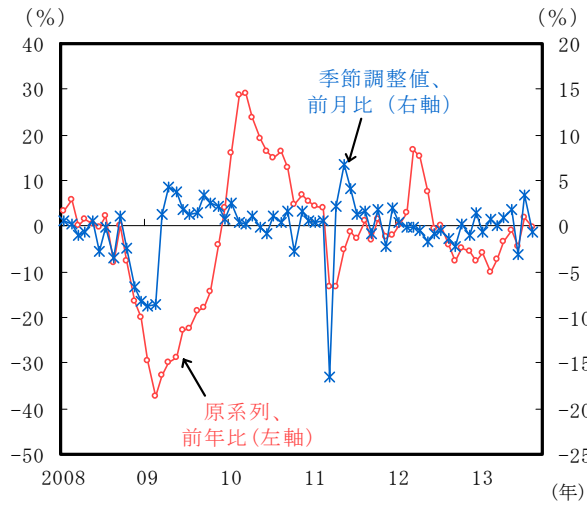
先行きに関して、生産は今後も増加基調が続くと見込んでいる。生産が安定的に増加するかどうかは、輸出数量の増加がカギとなる。新興国経済の減速等から、輸出数量の増勢はこのところ鈍化しているものの、米国の景気拡大や円安の効果によって今後も増加傾向が続くとみられ、生産を牽引する見込み。さらに、2012年度補正予算による公共投資の増加や、2014年4月に予定される消費税増税前の駆け込み需要によって、内需は年度末にかけて加速し、生産を押し上げる公算が大きい。

輸出数量、出荷・在庫バランスと生産



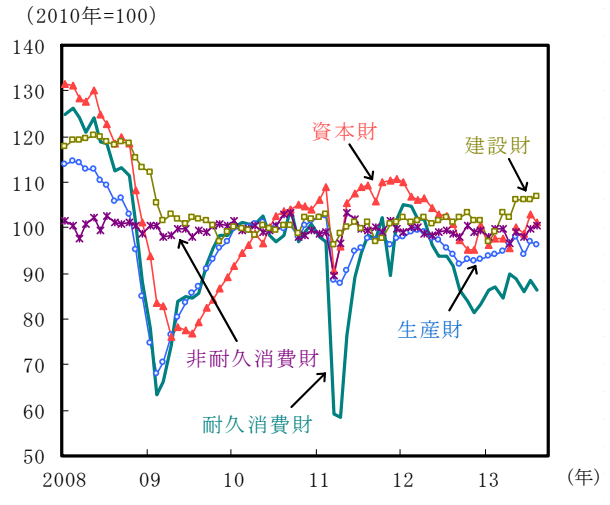
概況

鉱工業生産指数の変化率

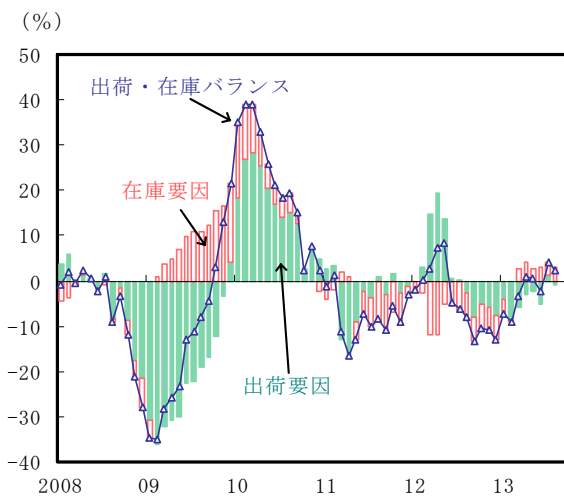


(出所) 経済産業省統計より大和総研作成

財別の生産指数(季節調整値)

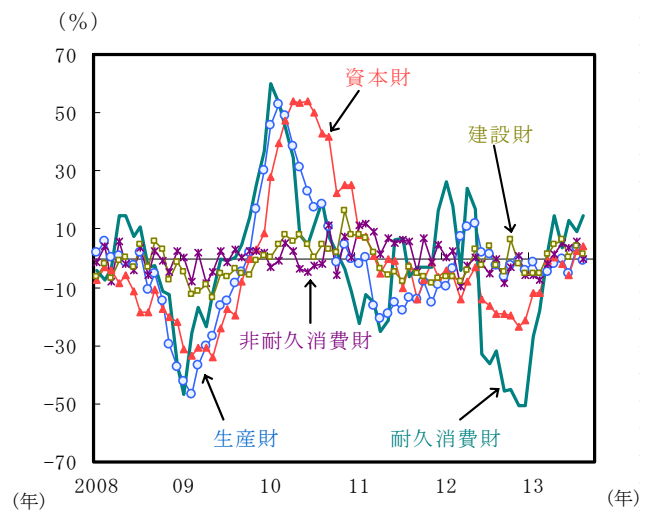


鉱工業生産指数の出荷・在庫バランス

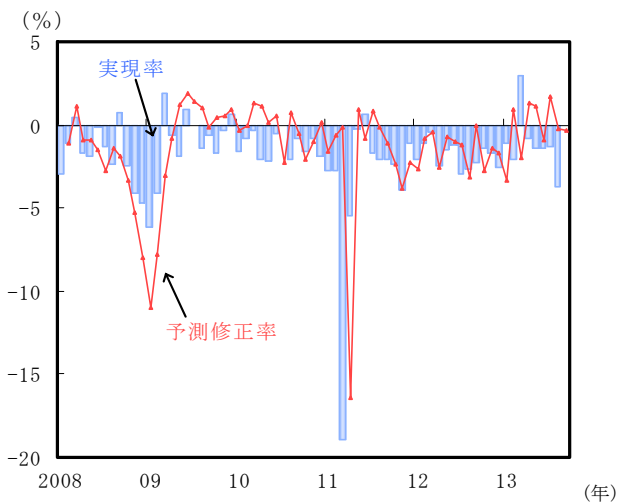


(出所) 経済産業省統計より大和総研作成

財別の出荷・在庫バランス

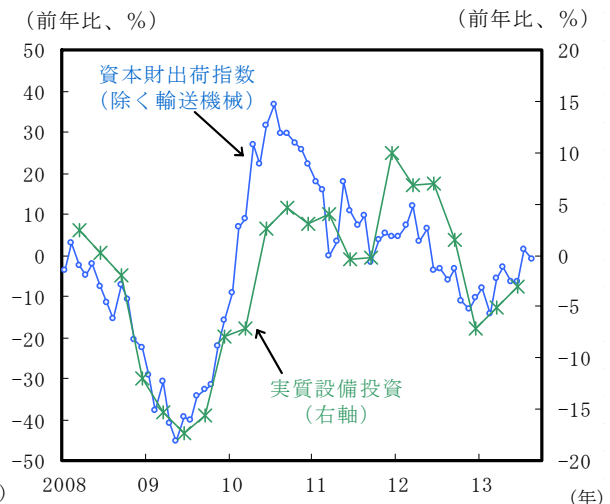


予測修正率と実現率



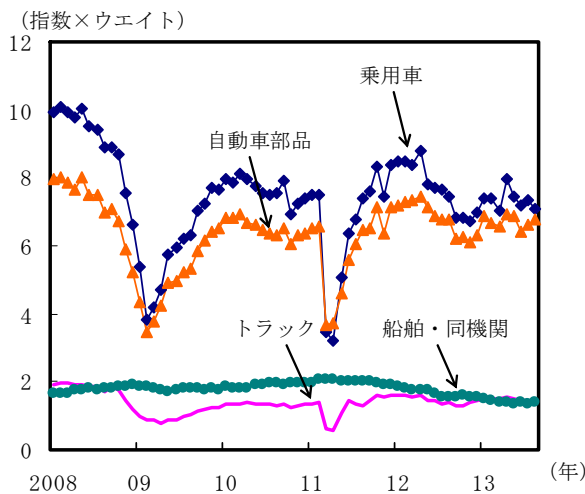
(出所) 経済産業省、内閣府統計より大和総研作成

資本財出荷(除く輸送機械)と設備投資

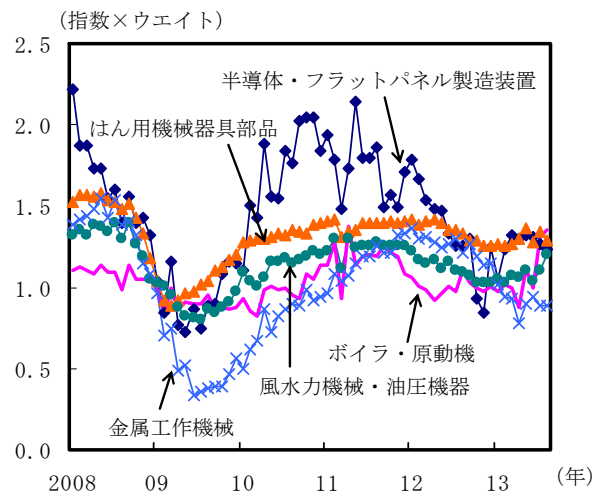


主要産業の生産動向(季節調整値)

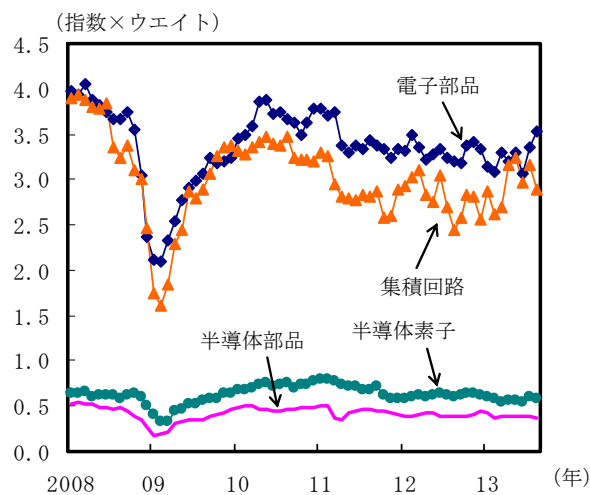
輸送用機械



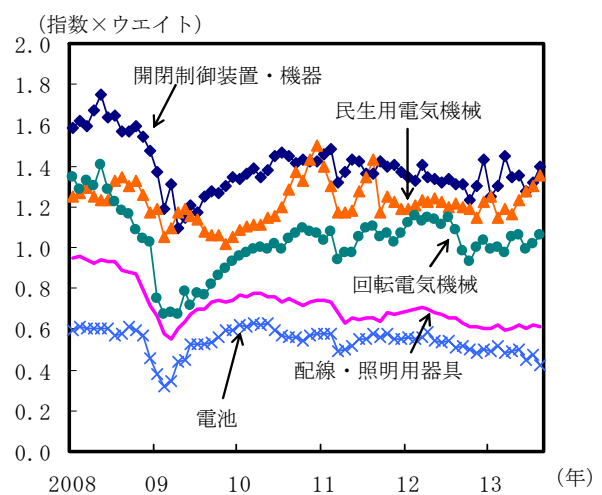
はん用・生産用・業務用機械



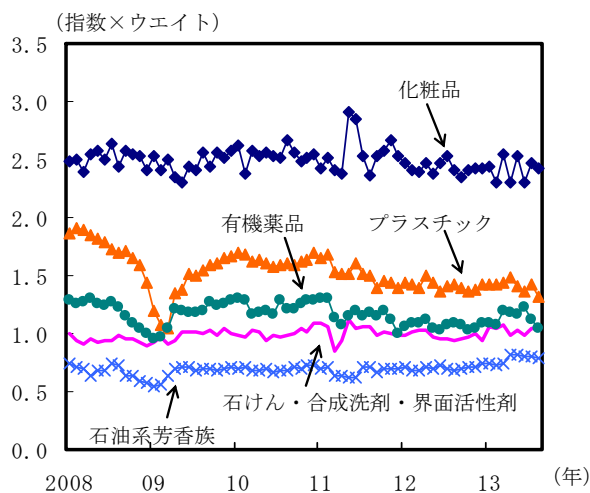
電子部品・デバイス



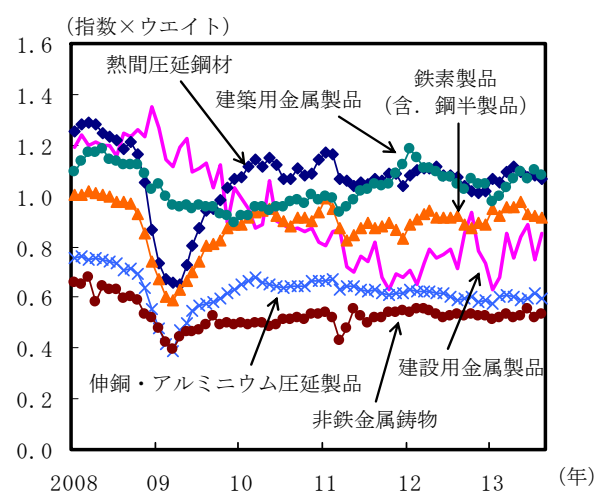
電気機械



化学



鉄鋼・非鉄金属・金属製品



(出所) 経済産業省統計より大和総研作成